

岡部定一郎「福岡城寸描」(21)

1. 福岡城の構え

櫓の巻9 お城を支える様々な櫓

お城の櫓は、和戦両用の備えで構築されている。その役目を背負って、それぞれ、日々の任務に適した場所、且つ城郭としての姿が美しく見える場所に位置付けられている。

食料の要となる塩櫓や炭・燃料や米櫓、井戸水場を確保する櫓、皮革品を収納している革櫓、渋を塗って紙の質を強度にし、油を引いて格納している渋皮櫓、倉庫的役割の長櫓など、城内での長期戦に備える諸設備の櫓が大小様々あり、儀式祭礼の道具等を収納する櫓や犯罪者や未決囚を閉じこめる牢屋的な生け捕り櫓などもあった。

その昔から47櫓と言われているが、その建物の姿が不明なものもある。

福岡本城三の丸台地の4隅の内、西側の南北隅には、先に記したように、花見櫓と潮見櫓があったことは明らかなので、東側の南北隅にも、それぞれ隅櫓があった筈であるが、詳細は不明である。古地図には、櫓跡とのみ記されている。

記録によると、初代藩主長政公の夫婦の住まいの御殿は、築城早々の頃は、三の丸(東丸)にあった。正保3年(1641年)の「福岡惣絵図」にも、「屋くら跡」と記されている。

この南北にある二つの三の丸櫓は、文禄慶長の役の折り、肥前名護屋城の櫓として構築されたものを、豊臣秀吉の死後、移築したものではとの説もあるが、その後、豊臣ゆかりの櫓では、徳川政権に悪かろうとの気兼ねもあって、破却したのではと推測されている。

その後、東三の丸は、黒田家重役の邸宅地となり、第1期は、黒田24騎の一人であった栗山備後(栗山大膳の父)の屋敷となり、第2期目は、同じ重役の一人であった立花実山の屋敷となった。

戦後、高等裁判所が建てられたが、これも近年中に引っ越しをする予定になっており、史跡地に戻ります。

櫓の巻 おわり



